

救世の殿、いも代官

－ 飛驒に赴いた幸田善太夫－

いも類振興情報編集部

岐阜県高山市をとおって富山に向かうJR高山本線は、壁のようにそそり立つ山裾にびったりと身を寄せながら、木曾川の支流飛驒川に沿って北へと進みます。この先、ほんとうに人が住んでいるのだろうか、と思わせるほど、行けども行けども緑一色の深い溪谷沿いに走ることにしばらく、ぱっと視界が広がり、田畑、果樹園、その間に散在する人家が見え、間もなく飛驒の中心高山駅に到着しました。

観光地としてあまりにも有名なこの街には、多くの史跡、文化財が残され、古い家並みには昔の暮らしをしのばせる品々が置かれ、絶えることのない人の波が行きつもどりについています。春秋2回催される高山祭には、屋台が市中を練り歩き、内外の観光客は、そのけんらん豪華さに驚嘆し、からくり人形の妙技に惜しめない拍手を送っていました。

年間多くの人を引き寄せる観光地として、また飛驒の行政、商工業、農業、教育の中心地となっているこの街は、四方に山をめぐるし、連山が起伏し、清流が走り、その美しい景観が史跡などとあわせて、人々の心をとらえ、深い感銘を与えているのでしょう。

1. 天領となった飛驒

飛驒の地は、戦国時代に三木目綱みつめつなが城を構えていましたが、やがて豊臣秀吉の命により三木氏を平定した金森長近が領主に任ぜら

れ、天正14年（1586）新たに高山城を築き、現在の高山の街並みの基を形づくり、6代107年にわたって治めてきましたが、6代目金森よりときは元禄5年（1692）、出羽国上の山（現山形県上市市）に封ぜられ、その領地はすべて徳川幕府直轄、すなわち天領となりました。

金森氏は代々この豊かでない飛驒の領民のために善政を施し、移封に際しては、国をあげて留任が嘆願されたほど慕われていましたが、その金森氏がどうして出羽に移されたのでしょうか。いろいろと理由がありましようが、農を営むには決して恵まれた条件にはない飛驒も、ヒノキ、サワラなどの良材が豊かで、またこれらを用いた建築、木工の技術も優れていたため、直接にこれらを支配したいと幕府が着目したのも、その一因であったかもしれません。

金森氏が出羽に移封された元禄5年に、関東郡代伊那半十郎忠篤が在職のまま飛驒代官となりましたが、その後3代目までは関東郡代と飛驒代官兼務のまま、4代目からは専任の飛驒代官が任命されています。代官が実際に高山に居を移して執務するようになったのは、7代目長谷川庄五郎忠宗ただむねのときからですが、11代目までは代官（5万石格）、12代目からは郡代（10万石格）に昇格しました。

金森氏の居城であった高山城は、元禄8年



に取り壊しがはじまりましたが、同氏の下屋敷が天領となった以後の代官、郡代の施政の場所として使われています。この政務の場所を高山陣屋と称し、その後数回にわたって改築が行われ、幸いにして災害を受けることもなく明治維新を迎え、建物はそのまま地方官庁として用いられてきました。昭和4年(1929)には貴重な文化財として国史跡に指定されています。昭和44年(1969)に、それまであった県の飛騨事務所が移転し、元禄8年(1695)から270年余り続いた役所としての務めを終えましたが、現在に残る全国唯一の郡代所であり、高山観光の中心として、毎日多くの観光客が訪れています。

2. 為政者と飢餓対策

他所からここを訪れる人には、この地の景観はまことに美しいのです

が、飛騨は山国であり、平坦なところが少なく、また厳しい冬が長く、この地で暮らす住民はたいへん苛酷な生活を強いられてきました。いまのように技術が発達していない昔、農業は天候不順、病害虫の発生などによる災害を受けやすく、立地条件のよくないところは、常に凶作と背中合せでしたが、飛騨はとくにこの問題が深刻で、金森氏、またその後の各代官、郡代は、いかに領民を飢えさせず、少しでもましな暮らしをさせてあげたいと、常々心を砕いていたに違いありません。

現代のように物資の交流が盛んでない往時は、その土地で少しでも多くの生産をあげ、また新しい産業を興すのがもっとも確かで、またこの他に途はなく、金森氏はもとより、その後の代官、郡代も多くは新たな殖産を指導したりして領民の信望もあついていたのですが、ときには大きな農民騒動が勃発し、とくに第12代、13代の大原彦四郎、同亀五郎父子二代にわたる失政がもとであるために、大原騒動と呼ばれる一揆が広く知られています。騒動は数回にわたっておこり、原因はなかなか複雑ですが、要は飛騨の森林資源



高山陣屋

が長年の伐採によって質量ともに減少し、その涵養をはかる目的で5年間伐採を禁止したこと、それと重なって干ばつで不作となったにもかかわらず、年貢の納入時期を早め、しかも江戸に3,000石という多量の年貢米を直納するという事態となったこと、さらに幕府の莫大な負債を補充する目的で新たに検地を行ったこと、等々によりますが、いずれも鎮圧されて農民側が一方向的に処罰されています。

しかしその後、息子の13代郡代が若年であったために、それをよいこととした多くの不心得な部下が汚職を繰返して大きな騒動が起り、この場合は非を認められた郡代が八丈島に配流されました。美濃で起こった有名な郡上一揆も、似たような立地条件の場所で発生していて、当時の農山村の暮らしが困窮に満ち、生殺与奪の権を握った領主、代官等の思いやりのない施政が領民を苦しめ、刺激したことをうかがい知ることができます。

とかく失政が騒動のもととなった為政者は歴史上名が残り、善政はあたりまえのこととして、あまりその名が知られていないのが常ですが、当時の為政者がもっとも意を用いたのは、なんといっても飢餓対策でした。寒冷の飛騨ではイネをはじめ、どの作物も暖地のように安定した収穫が得られるとはかぎらず、しかも課せられる年貢は大きな負担となります。平年でも近隣の藩から多くの米の移入を仰がねばならず、そのためには馬役の代価を米で受取ったり、この地の特産物の硝石(火薬の原料として用いられます)を売り、その代金は米で、という具合に、少しでも



現在の国府町蓑輪地区

領内に米が入るよう努力が払われました。延宝3年(1675)には大凶作となって餓死者は数万ともいわれ、享保17年(1732)の凶作時には、次の年に高山で米騒動が起こるなど、凶作は大きな社会不安の因となっています。

3. 「お助け薯」の導入

幸田善太夫^{たかなり}高成は延享2年(1745)に8代目の飛騨代官に任ぜられていますが、領民を思う心は人一倍篤く、飢餓対策にとくに意を留めていました。着任の翌延享3年には領内の山野に樹木苗を植えつけるよう懇切な指令を出し、荒地を開墾して食糧を増産するよう指示し、また米を他国へ売り出すことを禁止しています。植林した土地を調べて枯れた苗木は植え換えるよう命じていますが、寛延3年(1750)に、ふたたび苗木植えつけを奨励し、植付けの本数を書面で届け出るように命ずるなど、大切な資源である森林の涵養にことのほか意を用いています。

善太夫の飢餓対策として特筆すべきは在任中に東北地方から馬鈴薯を移入し、これを領

内一円に広めたことでしょう。一説には隣国信濃からの導入ともいわれていますが、長崎にはじめて馬鈴薯が入ってから150年前後で日本国内に広く伝えられ、栽培されていたことがわかります。善太夫が導入するまでは、飛騨ではつくられていませんでしたが、このおかげで、のち天保飢饉（天保4年、1833）のときに大いに役立ち、この地では馬鈴薯のことを「善太夫薯」「お助け薯」と呼ばれるようになりました。また導入された当時から通称「せんだいも」とよばれ、これは「善太夫薯」から変わった、あるいは「仙台芋」が縮まったもの、ともいわれていて、この点からみれば東北からの導入が、あるいはより確かなのかもしれませんが、詳細は不明です。

善太夫は、このように善政を施したのですが、不幸にして在職僅か5年で寛延3年病のために逝去しました。飛騨にとってまことに惜しむべきことであります。

「農具揃」という農書があります。これは農作業に用いる道具などについて解説したのではなく、何月にはどのような作物を、どのようにして植えるか、どのように管理するか、など細かく懇切に記述していて、とくに飛騨での農業指導書ともいうべきものですが、著者の大坪二市は文政10年（1827）飛騨国吉城郡広瀬町村（現岐阜県吉城郡国府町）に生をうけ、24歳のときに隣村の蓑輪村組頭をつとめたのをはじめ、のち村政、農事奨励、学校教育の多くの役職に就いています。慶応元年（1865）38歳のときに著した「農具揃」の5月の項に、馬鈴薯植付についての指針が載っていますが、現代の表現になおすと次のようになります。

「田植えが済んだら馬鈴薯を植えるとよい。



合掌造りの家（下呂市）

植え方は種いもを畑の畝に植えた後、わら肥を入れ、片方から土を鋤きながらかけるとよい。両方から土をかけることを“ゆうこう”というが、これはよくない。また春まだ早いうちに植えると虫がつくのでよくない。もともと馬鈴薯は外国から渡ってきたもので、その名をジャガタライモといったのだが、後に馬鈴薯という名になって日本全国に大いに広がったのである。しかし、この飛騨の国には寛延年間までこのいもがなかった。7代目の御代官幸田善太夫殿が当国には馬鈴薯がないことを知り、初めて信濃国から取り寄せて当国内に配布して植えさせたところ、みな大いに喜び、“善太夫いも”と名付けた。それがいつしか“せんだいも”といわれるようになった。また信州いもというが、これはそのよ

うなわけからである」。

この農書にも善太夫の功績を紹介し、この馬鈴薯が信濃国から導入されたとあり、東北説とは異なっています。そしてここに述べられている5月は新暦では6月で、現代でも戦後しばらく田植えの最盛期は冷涼地帯では6月はじめ頃、温暖地では6月中下旬が一般でした。したがって「せんだいも」の植付けは新暦の6月に入ってから行われていたとみられます。

4. 特色ある秋作栽培

ふつう馬鈴薯は、冷涼な地域では春に植えて夏季間涼しい気候のもとで生育を続け、秋に収穫しますが、それよりも暖かいところでは早春に植え、夏の暑さがくる前に収穫します。以前一般に行われた水田の裏作では、馬鈴薯を6月の中旬頃までに収穫し、その後田植えをしましたが、「せんだいも」は田植えのあとに植えられますので生育の盛りの暑さはかなり酷しいものの、日照時間は次第に短くなり、短日、低温となった頃に収穫され、これが広く栽培されている馬鈴薯と異なりま

す。その年の天候からみて、今年はもしかしたら不作になるかもしれない、と思われたときに植えても十分な収穫があがるために、救荒作物としてはもっとも好ましく、長年にわたりこの土地の人たちに親しまれてきました。

長崎へ馬鈴薯が伝来したのは旧オランダ領東インド（現インドネシア）からですが、その後代で、いま長崎県ははじめ日本の暖地で広く栽培されている馬鈴薯は年に春秋2回つくることができ、この点が明治維新以後北米、欧州から導入されたものとの大きな違いの一つになっています。年に2回つくれる品種の多くは春作の方が多収が得られますが、なかには春はあまりよくないけれども、秋にはたいへんよい、というものもあり（例、タチバナ）、「せんだいも」はこれに似た特性をもっていたのかもしれませんが。言い伝えによりますと、肉色は白く、たいへん美味しかった、とのことで、このいものためにその後の飢饉に際してどれほど多くの人が死を免がれたか、はかり知れないものがあり、飛騨の人たちが善太夫を命の恩人とあがめるのも、当然のことといわれるゆえんです。

惜しいことに長く作り続けられてきた「せんだいも」も、明治の末から大正の頃（1910～20頃？）にかけて病害（注、ウイルス病と思われる）によって絶えてしまいました。それでも馬鈴薯として比較的長命を保てたのは、飛騨が山国で、生育する期間が比較的涼しく、しかもその生育の盛りが晩夏から秋にかけてであって、一般にこの頃には、春から初夏にかけ



酒造店（飛騨市古川町）



白壁土蔵街（飛騨市古川町）

ての時期ほどには病害をうつす虫（アブラムシ）の発生が多くはなく、そのために病気にかかることが少なく済んだのかもしれない、また地形的にも他藩とは隔絶され、その影響を受けることも少なかったから、かもしれません。しかし、明治以降に新たな作物の栽培も試みられ、それに伴って他地域から種苗が持ち込まれたりして、それがもとで病害にかり、貴重な「せんだいも」も遂に失われてしまったものと思われます。

5. 高まる馬鈴薯栽培熱

飛騨の地の馬鈴薯栽培は「せんだいも」の導入以来、秋作の形で続けられてきましたが、前記「農具揃」の大坪二市は、春秋二作を奨励しています。二市は稲作の改良、茶、桐苗

の導入、桑の改良、菜種の栽培奨励、その他農事改良普及にとくに意を用い、数々の業績を残し、のち農商務大臣より功労賞を受け（明治34年、1901）岐阜県知事より表彰される（同35年）などおおくの賞を受け、農業振興の面で善太夫とならび、岐阜県の大功労者としてその名を留められています。ここでいう年二作は、現在長崎県などで行われている、同じ品種を用いての春秋作ではなく、「せんだいも」とは別に春先に植えて初夏に収穫できる品種を取り入れてのこととされます。つまり、飛騨の地には秋に収穫する「せんだいも」と初夏に収穫する別の品種との、二通りのいもを用いての栽培が明治末から大正時代まで行われてきたのでしょうか。

一歩先んじて馬鈴薯栽培が盛んとなった出羽国由利郡（現秋田県）の岡田明義は文久元年（1861）「馬鈴薯栽培法」を著わし、同書は明治元年（1868）に改版されていますが、二市の出身地蓑輪村では、明治のはじめ頃からこの書を指南として馬鈴薯栽培熱が一層高まっています。同書の序文の一部を現代の表現になおしますと、「ジャガタライモは漢名を馬鈴薯といい、これを植えると数十倍にふえる。収穫されたいものうち、よいものは食用となり、または菓子、餅を作るのに用いられる。食用にならないような小さなもの、傷のついたものは味噌にしたり、酒を醸造するのにも使われる。このように人々の食物としてたいへん価値があり、米の不作のときの救荒作物の最たるものであるから云々」とあって、新たな用途についても述べられています。

6. 飛騨地での甘藷栽培

同じ救荒作物の甘藷についてはどうでしょ

うか。飛騨は高冷の地ですから、馬鈴薯には適しても、甘藷栽培には適地とはいえません。しかし、以前から他藩より持ちこまれ、住民はその味を知っていて、この地で作ってみたいとの希望を持っていたことでしょう。明治維新となって作物栽培の規制も緩められたためか、明治3年には代表者が新しい作物導入を県に上申していますが、そのなかに「…空地開拓、五穀は勿論、其他地味に応じ、桑、茶、あるいは琉球芋を始め…」とあり、琉球芋、すなわち甘藷を作りたいと申し出ています。

この申し出がどのようにとりあげられたか、については明らかではありませんが、下って明治37年（1904）には二市の出身地国府村の下畑佐兵衛が甘藷苗作りをはじめ、記録によると苗は吉城郡役所、国府村役場をはじめ、村内各区に計13,500本余り渡され、その終了は6月14日となっていて、郡役所、村役場に渡して、そこで栽培されたことは、それまでには村内、近隣の地区では作られていなかったのではなからうか、そのため役所、役場が試みに作ってみようと考えた

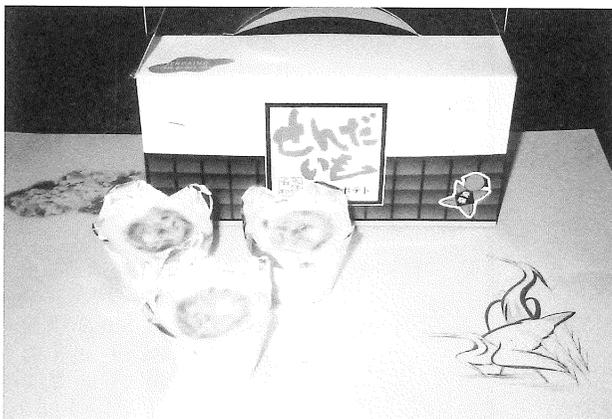
からではないか、そして苗の配布終了が6月中旬となっているのは、この頃にはここでも晩霜がなく、気温、地温も上昇するからではないか、などが想像されます。

その後これら地域での甘藷栽培はどうなったか、ですが、日華事変勃発後3年、戦時色がますます濃くなってきた昭和15年（1940）8月には、県の告示で農産物の移出取締りを受ける品目として米穀、雑穀、穀粉、麺類、青果類（甘藷、馬鈴薯）とあり、青果とはいえ甘藷、馬鈴薯は穀類並みに準主食と位置づけられています。そして同15年11月には飛騨の地にもアルコール原料切干藷の供出割当てがありました。同17年には甘藷増産供進会が催され、村での出品者53名、受賞者18名とあり、昭和十年代にはこの地でも、かなり広く甘藷が作られていたことがわかります。しかし現在では甘藷の畑を見ることはありません。日本での甘藷栽培は昭和40年（1965）頃から減りはじめましたが、もともと適地とはいええない飛騨では他の産地での生産が減りはじめる以前に、早くその姿を消してしまったことでしょう。

現在二市の出身地国府町の農業生産事情は、平成14年度で粗生産額1,851（百万円）、うち野菜564、米446、果実415、肉用牛272、花き75、となっていますが、いも類は僅か6で、世のうつりかわりの激しさをつくづくと感じます。

7. 現代に生きる「せんだいも」

高山市の北隣国府町（旧国府村）のさらに北隣の古川町は、いまでは近隣町村と合併して飛騨市とな



ケーキ「せんだいも」

りました。古川町にも高山で見られるような古い街並みが残っていますが、よく管理されて道幅も広く、個々の家も大きく、訪れる観光客も高山ほど多くはなく、ゆっくりと落ち着いて散策できます。

高山市とくらべ、いわゆる“観光資源”は決して多くはありませんが、毎年4月19、20日に催される飛騨古川祭では、華麗な屋台が町に繰り出し、かりくり人形の実演、子供歌舞伎の上演もあり、また男達が大太鼓を打ち鳴らしながら激突する、有名な起こし太鼓もあって、祭は国指定の重要無形民俗文化財となっています。また、冬の1月15日には市街中心にある円光寺、真宗寺、本光寺を巡ってお参りする三寺まいるの伝統行事もあり、その昔、信濃の国へ糸ひきの出稼ぎに行っていた娘達が、着飾って雪の川べりを歩いたことから“嫁を見立ての三寺まいる”と歌われています。

平成14年(2002)4月から9月にかけて放映されたNHK連続テレビ小説「さくら」の舞台となったことで、この町は一躍有名となり、ヒロインさくらが下宿した「三嶋ろうそく店」は手造り店としては全国唯一といわれ、いまではこの町の代表的な観光名所となっていて、店先は記念写真を撮るグループでいつも混み合っています。

古い家並みは明治時代からの酒造店のほか、郷土料理、みやげものの店もあり、いずれも古風なたたずまいで、まさに数十年も昔に立ち戻った感じです。店先に土地の名産を並べている喫茶店で思いがけずも“いも”で作った菓子をみつけました。アイスクリームのストッカーに納められていて、目につきにくかったのですが、紙函入りで「せんだいも」

と名付けられています。古川町で最近考案し発売されたもので、マッシュにしたいもをベースにしたレアケーキのようなもので、傷みやすいため常時冷凍保存している、とのことでした。古い白壁の蔵をイメージした函に、このケーキが入り、外側にはせんだいもの由来として前述したように、飛騨代官幸田善太夫が馬鈴薯の特産栽培をさせたこと、天保飢饉のときに人々がこれによって助けられたこと、今でもここでは善太夫をしのんで「せんだいも」と呼んでいること、の説明が付記されていました。

時代の大波には抗すべくもなく、飛騨の馬鈴薯作もほとんど消えかかり、隔世の感を禁じ得ませんが、馬鈴薯の普及に尽力した人達が忘れ去られることなく、新たな町興しの名産として取り上げられていることに感銘し、救われる思いでした。

編集後記 酷暑と台風にわざわざいされながらも、清楚な花を毎日咲かせてくれたスレインも、静かに身を寄せて長い休息に入ろうとしています。夏の間、池の水面もずいぶん下っていましたが、このところ続いた雨で満々と水をたたえています。はや北の国から渡ってきたカモが、3、4羽、水の帯を引きながら滑るように泳いでいますが、間もなくほかの仲間もやってきて、これからの静寂の季節に微笑ましい動きを与えてくれるでしょう。

いも類振興情報 第81号

平成16年10月15日発行

発行所 財団法人 いも類振興会
〒107-0052 東京都港区赤坂6-10-41
ヴィップ赤坂303号室
電話 03-3588-1040
FAX 03-3588-1225
振替 00130-1-110152
印刷所 JTB印刷株式会社